

工学系学生の就職不安とその支援

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宇賀田, 栄次, 田中, 利恵子, 大石, 美紀子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00026334

工学系学生の就職不安とその支援

宇賀田 栄次（静岡大学学生支援センター）

田中 利恵子（静岡大学浜松キャンパス事務部浜松学生支援課）

大石 美紀子（静岡大学学生支援センター）

はじめに

厚生労働省と文部科学省が共同で行う就職内定状況調査によれば、2019年3月大学等卒業予定者の10月1日時点での就職内定率は77.0%で、前年同期比で1.8ポイント上回った。昨年度卒業者の就職率は98.0%で1997年の調査開始以降過去最高だったことから、学生にとっては引き続き良好な就職環境が続いていると言える。なかでも工学系学生の就職率は他学部系統に比べて高いとされ、製造業が牽引する日本の産業構造や実学志向の教育研究体制などの背景もあり、卒業者の多くが技術者となる。2018年3月大学卒業においても工学系の大学卒業生のうち79%以上が「専門的・技術的職業」に就いている。

一方で、工学系学生は他学部系統に比べて中途退学率が高く、入学後の不適応も少なくないことが報告されている。大学1年次、2年次での退学だけでなく、3年次、あるいは4年次での退学者も他学部系統に比べて高いことから、卒業や就職を意識する時期にも重なり、他学部系統とは異なる就職への不安も仮定できる。

本稿では、工学部と情報学部をおく静岡大学（以下、本学）浜松キャンパスでの就職相談データをもとに工学系学生の就職不安の仮定を検証し、その支援の在り方について考察する。なお、本学の情報学部は1995年の全学的組織改編によって設置され、工学部知能情報工学科（当時）から発展した工学系の情報科学科と、新たに開設した文科系の情報社会学科で始まった学部（2016年度からは行動情報学科を創設）だが、文部科学省の学科系統分類表にしたがって本稿では工学系として位置づける。

1. 工学系の就職状況と戦後の理工系拡充計画

先に示した就職内定状況調査は大学62校の抽出調査であることのほか、ここでいう就職率は就職希望者に対する就職した者の割合であり、就職を希望しない者や就職を諦めた者は含まれない。文部科学省は、就職希望者を「卒業年度中に就職活動を行い、大学等卒業後速やかに就職することを希望する者を行い、卒業後の進路として「進学」「自営業」「家事手伝い」「留年」「資格取得」などを希望する者は含まない」としているが、就職希望者かどうかは主観的な判断も残ることから、より客観的な就職状況を確認するため、他の指標を用いてみたい。

株式会社大学通信などの民間事業会社は、 $\text{＜就職者数} \div \text{〔卒業生数} - \text{大学院進学者数〕} \times 100\text{＞}$ で算出される割合を「実就職率」と呼び、「就職に強い大学ランキング」などとしてその割合が高い大学を発表している。昨今この割合やランキングを広報資料に活用する大学も増えていることから、就職状況をこの「実就職率」に当てはめて推移を確認する。

直近の学校基本調査（2018）によれば、2018年3月卒業生565,419人のうち、大学院進学者（61,654人）を除いた者が503,765人、就職者が436,093人で実就職率は86.6%となる。同様の方法で過去20年間の状況をまとめたものが表1であり、86.6%はこのうちで最も高い割合であることが分かる。

表1 大学卒業者の実就職率および求人総数、求人倍率

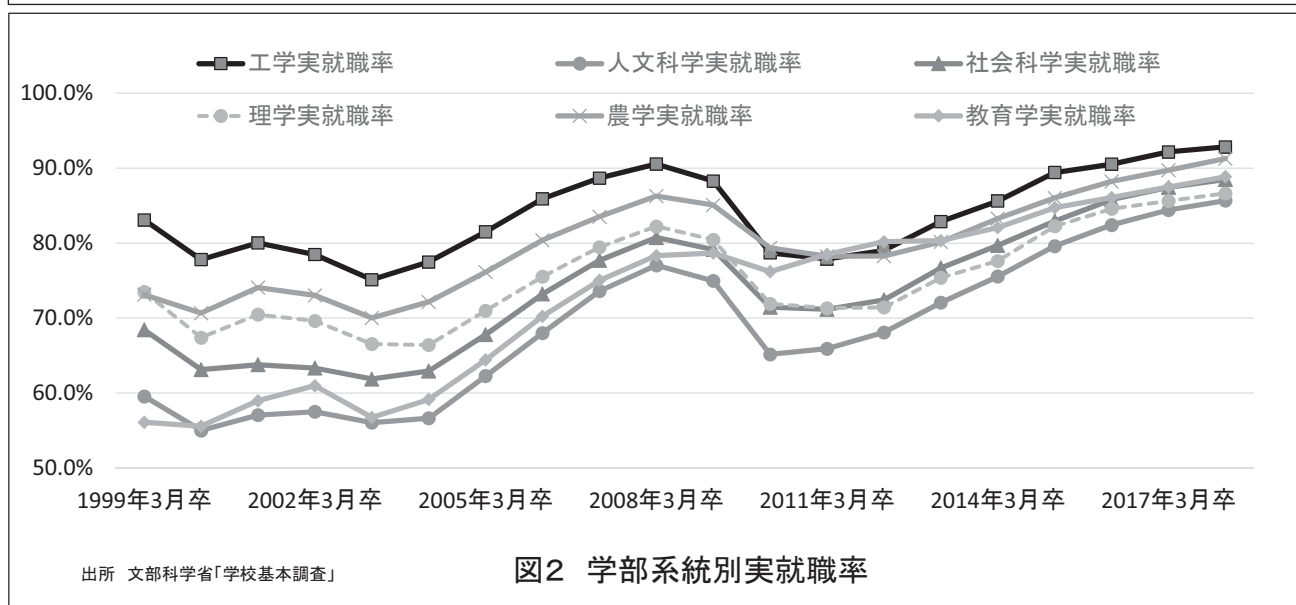
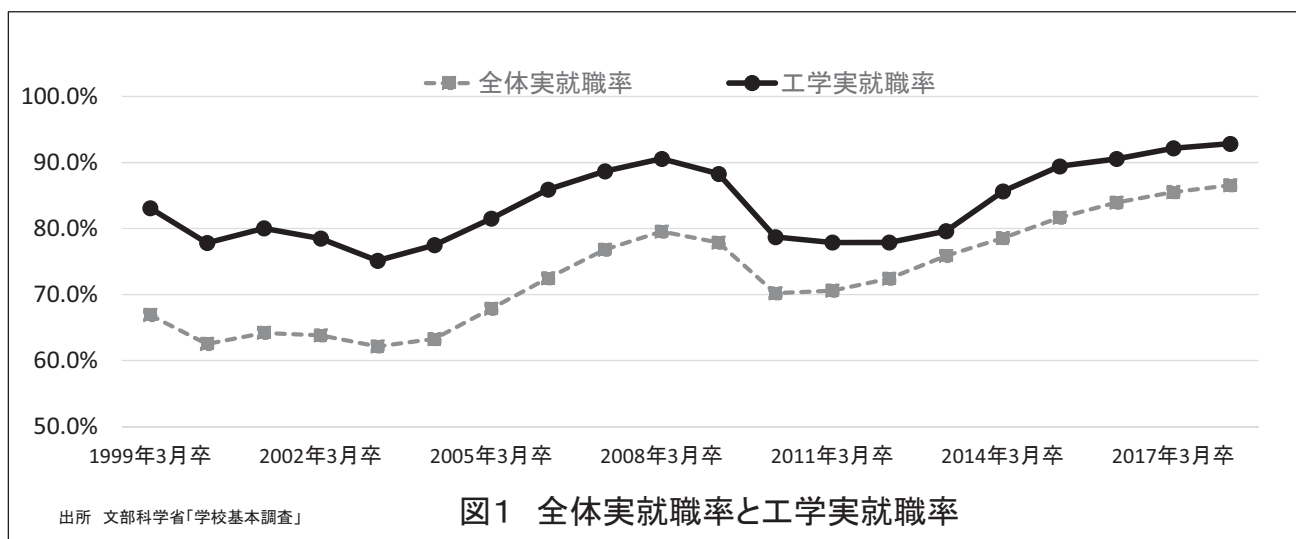
単位のないものはすべて(人)

	11年3月卒 (1999年卒)	12年3月卒 (2000年卒)	13年3月卒 (2001年卒)	14年3月卒 (2002年卒)	15年3月卒 (2003年卒)	16年3月卒 (2004年卒)	17年3月卒 (2005年卒)	18年3月卒 (2006年卒)	19年3月卒 (2007年卒)	20年3月卒 (2008年卒)
大学卒業業者(A)	532,436	538,683	545,512	547,711	544,894	548,897	551,016	558,184	559,090	555,690
大学院進学者を除く卒業業者(B)	478,413	481,020	486,850	488,035	482,643	484,287	484,908	490,886	491,915	488,318
就職者(C)	320,072	300,687	312,450	311,471	299,925	306,338	329,045	355,778	377,734	388,417
実就職率(C/B)	66.9%	62.5%	64.2%	63.8%	62.1%	63.3%	67.9%	72.5%	76.8%	79.5%

	21年3月卒 (2009年卒)	22年3月卒 (2010年卒)	23年3月卒 (2011年卒)	24年3月卒 (2012年卒)	25年3月卒 (2013年卒)	26年3月卒 (2014年卒)	27年3月卒 (2015年卒)	28年3月卒 (2016年卒)	29年3月卒 (2017年卒)	30年3月卒 (2018年卒)
大学卒業業者(A)	559,539	541,428	552,358	558,692	558,853	565,573	564,035	559,678	567,459	565,419
大学院進学者を除く卒業業者(B)	491,117	468,889	481,893	493,009	495,519	502,546	501,797	498,157	505,148	503,765
就職者(C)	382,434	329,132	340,143	357,011	375,859	394,768	409,710	418,095	432,016	436,093
実就職率(C/B)	77.9%	70.2%	70.6%	72.4%	75.9%	78.6%	81.6%	83.9%	85.5%	86.6%

出所 文部科学省「学校基本調査」

学部系統ごとの実就職率を見ると、工学系は全体の割合に比べて高く(図1)、他学部系統と比べても過去20年間ほとんど最上位である(図2)。



工学系就職者の多くが技術者として就職するが、過去 20 年間を見ても 7 割以上が「専門的・技術的職業」として従事している（表 2）

表 2 工学系就職者に占める専門的・技術的職業従事者

	単位の無いものはすべて(人)									
	1999年卒	2000年卒	2001年卒	2002年卒	2003年卒	2004年卒	2005年卒	2006年卒	2007年卒	2008年卒
工学系就職者	62,978	58,016	60,025	58,413	53,499	52,424	54,496	53,745	57,708	55,332
専門的・技術的職業従事者	51,497	46,473	47,115	45,262	40,107	38,659	40,838	40,825	44,694	43,273
%	81.8%	80.1%	78.5%	77.5%	75.0%	73.7%	74.9%	76.0%	77.4%	78.2%
	2009年卒	2010年卒	2011年卒	2012年卒	2013年卒	2014年卒	2015年卒	2016年卒	2017年卒	2018年卒
工学系就職者	54,578	42,328	43,295	43,905	45,714	47,357	49,001	49,521	51,146	51,953
専門的・技術的職業従事者	43,457	31,488	31,754	32,480	33,808	35,294	37,610	38,380	39,902	41,443
%	79.6%	74.4%	73.3%	74.0%	74.0%	74.5%	76.8%	77.5%	78.0%	79.8%

出所 文部科学省「学校基本調査」

言うまでもなく、戦後の日本経済を牽引し、GDP（国民総生産）でも約 2 割を占めるのが製造業で、それを支えるのが開発技術者や情報処理・通信技術者などに代表される「専門的・技術的職業」である。工学系学部はこれら技術者の養成、輩出という大きな役割を担っていると言えるが、これは紛れもなく戦後の経済成長という時代の要請が背景にあったのだろう。

戦後の学制改革により戦前の旧制大学、旧制高等学校等が 4 年制の新制大学として再編され、本学も 1949 年 5 月、旧制の静岡高等学校、静岡第一師範学校、静岡第二師範学校、静岡青年師範学校、浜松工業専門学校を統合し新制大学として誕生した。全国に目を向けると前年まで 12 校だった大学は一気に 178 校となったが、当時は法学、文学、経済、教員養成などの学部での在籍者が多く、工学系はその後の高度成長期の始まりとともに定員を増やしていった。例えば文部科学省学校基本調査によれば、1955 年 3 月の大学卒業生 70,015 人のうち工学関係学科は 9,613 人で全体の 13.7%だったが、10 年後の 1965 年 3 月には大学卒業生 135,419 人のうち工学関係学科は 26,698 人で全体の 19.7%まで拡大している。なお、この年は工学関係学科卒業生の 94.4%にあたる 25,223 人が「専門的・技術的職業」に就いていることから今以上に技術者として就職する割合が多かった。

この間、1957 年に、当時の文部省が 1962 年度までに「大量の科学技術者が不足するとの見通しの上に 1958 年度からの 3 ヶ年計画（計画の最終段階で 1957 年度からの 4 ヶ年計画に変更）として、国公私立および短期大学の理工系学生 8,000 人を増加養成する」と発表している。伊藤彰浩（2013）は、この発表に影響を与えたものとして 1956 年 11 月に当時の日本経営者団体連盟から出された「新時代の要請に対応する技術教育に関する意見」を挙げ、この意見書で「技術教育の重要性は殆んど顧みられることなく、大学について理工系に対し法文系偏重の風は以前認められず、義務教育についても理科教育および職業教育の重視の実は一向に挙っていない」「技術教育の振興こそ一日も遅延を許さない刻下の急務」と記されている箇所を引用している。

さらに 1960 年 4 月、文部省は先の「理工系 8,000 人増加育成」のプランに続き、向こう 7 年間にわたる「16,000 人理工系学生増員計画」も発表し、9 月には 20,000 人への増員計画に変更したが、これは経済政策と一体化したものであった。つまり、同年 10 月の科学技術会議答申「10 年後を目標とする科学技術振興の総合的基本方策について」や 11 月の「国民所得倍増計画」では、経済発展と国民の生活向上に

必要な科学技術の振興を長期的観点から推進するために理工系人材の養成が指摘されていることから、文部省の計画はこれらの方向を見越したものであったと言える。

伊藤（2013）によれば、「8,000人計画」は達成率99.5%、「20,000人計画」は達成率100.3%と極めて高く、学校基本調査を見ても、1960年3月16,572人だった工学系卒業者は1970年3月には48,481人とおよそ3倍になったが、「実就職率」は96.1%、「専門的・技術的職業」への就職割合は92.2%という良好な就職状況であった。

2. 大学中途退学や入学目的から見る工学系学生の特徴

経済政策を背景に良好な就職状況を実現してきた工学系学生だが、中途退学者も比較的多い。文部科学省の調査（2014）によれば、大学等（短期大学、高等専門学校含む）の中途退学者は79,311人で前回調査（2007）に比べて15,000人以上増えているという。理由の割合では「経済的理由」（20.4%）が最も多く、次いで「転学」（15.4%）「学業不振」（14.5%）「就職」（13.4%）が挙げられている。また、内田千代子（2011）は休学、退学の理由を①身体疾患群、②精神障害群、③消極的理由群（大学教育路線から離れるような理由 勉学意欲の不足や就職等）、④積極的理由群（大学教育路線上にあり、更に積極的な理由 例えば海外留学や資格取得準備等）、⑤環境要因群、⑥不詳、に分類した上で、2008年の調査においては、退学の理由として「消極的理由」が49.18%と約半数を占めることを示し、積極、消極的理由を問わず、「進路に関する理由」が増えていると指摘している。

表3 中退したときの専攻分野(大学および大学院)

		人文科学	社会科学	理・工・農	医療・保健・衛生	教育・福祉	芸術・服飾・家政・文化・教養	その他・分類不能	合計(%)	N
男性	大学	14.3	38.6	32.4	4.4	3.0	3.4	3.8	100.0	497
	大学院	8.8	35.3	50.0	5.9	0.0	0.0	0.0	100.0	34
女性	大学	26.9	25.6	12.1	9.9	5.4	12.1	8.1	100.0	223
	大学院	33.3	16.7	25.0	0.0	16.7	8.3	0.0	100.0	12
男女計	大学	18.2	34.6	26.1	6.1	3.8	6.1	5.1	100.0	720
	大学院	15.2	30.4	43.6	4.3	4.3	2.2	0.0	100.0	46

出所 独立行政法人労働政策研究・研修機構 2015「大学等中退者の就労と意識に関する研究」より大学と大学院のみ抜粋

表4 中退した専攻分野ごとの男女比、学年(大学)

		性別				中退したときの学年					
		男性	女性	合計(%)	N	1年生	2年生	3年生	4年生	合計(%)	N
大 学	人文科学	54.2	45.8	100.0	131	17.3	29.9	21.3	31.5	100.0	127
	社会科学	77.1	22.9	100.0	249	13.0	31.7	19.9	35.4	100.0	246
	理・工・農	85.6	14.4	100.0	188	11.9	28.1	33.5	26.5	100.0	185
	医療・保健・衛生	50.0	50.0	100.0	44	26.7	40.0	17.8	15.6	100.0	45
	教育・福祉	55.6	44.4	100.0	27	18.5	22.2	37.0	22.2	100.0	27
	芸術・服飾・家政・文化・教養	38.6	61.4	100.0	44	28.9	40.0	13.3	17.8	100.0	45
	その他・分類不能	51.4	48.6	100.0	37	37.1	25.7	20.0	17.1	100.0	35
	合計(%)	69.0	31.0	100.0	720	16.8	30.8	23.8	28.6	100.0	710

出所 独立行政法人労働政策研究・研修機構 2015「大学等中退者の就労と意識に関する研究」より大学と大学院のみ抜粋

一方、丸山文裕（1984）は学部系統では「社会科学」と「工学」、性別では男子の退学率の高さを指摘した。また、独立行政法人労働政策研究・研修機構の調査（2015）でも、大学中退者のうち、26.1%が「理・工・農」の専攻分野で、「社会科学」（34.6%）に次いで多いことが指摘されている。大学院は「理・工・農」が中退者の割合が最も高い（表3）。なかでも「理・工・農」では、男子が8割以上（85.6%）と高い。さらに「理・工・農」では、中退したときの学年が「3年生」（33.5%）、「2年生」（28.1%）、「4年生以上」（26.5%）、「1年生」（11.9%）の順で、「3年生」が高いのは「教育」（37.0%）に次いで高く、「1年生」は専攻分野のなかで最も低い（表4）。加えて、「理・工・農」では、最も重要な退学理由として「学業不振・無関心」（51.1%）「家庭・経済的理由」（16.7%）「進路変更」（13.8%）の順となっている（表5）。

表5 最も重要な中退理由(大学)

		学業不振・無関心	人間関係・大学生活不適應	進路変更	病気・ケガ・休養	家庭・経済的理由	特に何もない・その他	合計(%)	N
大 学	人文科学	31.8	14.0	16.3	12.4	24.8	0.8	100.0	129
	社会科学	46.1	6.6	17.1	8.3	19.3	2.6	100.0	228
	理・工・農	51.1	9.8	13.8	6.9	16.7	1.7	100.0	174
	医療・保健・衛生	51.2	9.3	11.6	16.3	9.3	2.3	100.0	43
	教育・福祉	28.0	12.0	12.0	20.0	28.0	0.0	100.0	25
	芸術・服飾・家政・文化・教養	38.5	12.8	12.8	17.9	17.9	0.0	100.0	39
	その他・分類不能	31.3	6.3	9.4	18.8	31.3	3.1	100.0	32
	合計(%)	43.1	9.6	14.9	10.7	19.9	1.8	100.0	670

出所 独立行政法人労働政策研究・研修機構 2015 「大学等中退者の就労と意識に関する研究」より大学と大学院のみ抜粋

同調査（2015）では、「大学進学選択時の進路意識」も尋ねており、「大学に行けば、将来自分がやりたいことが見つかると思った」について「理・工・農」で「よくあてはまる」または「まああてはまる」と回答した割合は80.3%と他の専攻分野に比べて多い。また、「目的は考えず、とりあえず大学に進学してみようと思った」についても「よくあてはまる」または「まああてはまる」と回答した割合は66.8%と「社会科学」「人文科学」に次いで多い。

上記に関連する本学の調査（2009）では、「本学を進学先とした目的・動機」として全学部に通じて回答が多いものは「私立に比べて学費が安い」「大学入試センターの試験結果から」「地理的条件」「専攻分野の特色」だが、工学部と情報学部について多いのが「就職の有利さ」（工学部25.8%、情報学部28.3%）である。

ここまでの調査結果から進路選択につながる工学系学生の特徴は次のように整理できる。

- (a) 就職率の高さや就職に有利になるという動機で大学受験時の学部選びを行う学生がいる
- (b) 学年が上がるにつれて学業不振や勉強面での関心が高まらないことに悩む学生がいる
- (c) 卒業後の職業や仕事について漠然と捉えている学生がいる

いずれも他学部系統の学生にもあてはまるものだが、工学系学生の多くが技術者になることが期待されている、あるいは周りからそう見られるという点において上記の点が就職不安に結びつきやすくなると仮定できる。すなわち、就職に有利だからと入学したものの、学年が上がるにつれて専門科目が増え、技術者になることを前提とした学びへの迷いや興味が薄れてくる状況が続くと自己への肯定感、自信が低下し、自分には職業や仕事の選択肢がないと思いつまむ状態である。これらのことが本学浜松キャンパ

スでの就職相談において検証できるか、相談データから考察してみたい。

3. 就職相談データから見る工学系学生の就職不安と支援

本学浜松キャンパスには工学部（定員 550 人）と情報学部（定員 245 人）、総合科学技術研究科修士課程に工学専攻（定員 262 人）と情報学専攻（定員 60 人）、その他博士課程があり、宇賀田栄次・栗田智子（2018）が示した本学静岡キャンパスとは別に学生への就職支援を行っている。事務組織として浜松キャンパス事務部浜松学生支援課就職支援係が業務を担い、常設型の就職相談（筆者の一人である大石を含め数名が担当）と伴走型個別支援（筆者の一人である田中が担当）で学生の相談や指導に対応している。

①就職相談利用状況

キャンパスごとの就職相談の利用状況（2期分）をまとめたものが表6である。在籍学生数や過去の利用状況などから月ごとの開室時間を設定するため、結果として浜松キャンパスの相談対応時間は静岡キャンパスの約 4 割となっている。浜松キャンパスにおける学生 1 人当たりの平均相談回数が静岡キャンパスに比べてやや少ないのが特徴である。

表6 静岡大学における就職相談利用状況

静岡キャンパス		キャンパス	浜松キャンパス	
2016年	2017年	年	2017年	2018年
2015年10月 ～2016年9月	2016年10月 ～2017年9月	期間	2016年10月 ～2017年9月	2017年10月 ～2018年9月
1218.5	1388	相談対応者の 勤務時間(時間)	498.5	507.5
1924	2093	相談件数合計(件)	692	710
589	619	相談学生実数(人)	240	264
1.58	1.51	1時間あたりの 相談件数(件)	1.39	1.40
3.27	3.38	学生1人あたりの 平均相談回数(回)	2.88	2.69

静岡キャンパス分は宇賀田・栗田(2018)より抜粋

表7 静岡大学における就職相談 相談主訴別件数

表7は相談主訴別件数をキャンパスごとにまとめたものである。浜松キャンパスは「一般企業向け履歴書・エントリーシート」「一般企業向け面接対策、模擬面接」に相談主訴の7割前後が集中していること、「インターンシップ」に関する相談が多いのが特徴である。製造業等での技術者への応募が多いことが推察され、学生の売り手市場が続くなか、応募企業を絞り、早期にエントリーシートや面接

静岡キャンパス		キャンパス	浜松キャンパス	
2016年	2017年	年	2017年	2018年
2015年10月 ～2016年9月	2016年10月 ～2017年9月	期間	2016年10月 ～2017年9月	2017年10月 ～2018年9月
123	134	就職活動の始め方、進め方	22	25
12	22	やりたい仕事が見つからない、自己分析	7	8
6	13	公務員、教員採用試験に向けた準備	7	2
16	11	公務員、教員、一般企業などの併願	3	2
19	22	応募先の探し方、絞り方、応募方法	8	7
3	6	OB・OG訪問、会社訪問、説明会	1	4
733	767	一般企業向け履歴書、エントリーシート	350	265
413	411	一般企業向け面接対策、模擬面接	189	224
425	453	公務員採用試験向け面接カード、面接対策	29	11
5	2	教員採用試験向け面接対策、模擬面接	0	1
26	45	就活の再スタートについて	6	10
61	62	内定受諾について	12	10
8	19	内定辞退について	2	9
0	2	内定取り消しについて	0	0
1	1	就職留年について	0	0
46	82	インターンシップについて	34	100
2	3	学校推薦と自由応募について	3	1
25	38	その他	19	31
1924	2093	合計	692	710

静岡キャンパス分は宇賀田・栗田(2018)より抜粋

に進むことが背景として考えられる。実際に一般企業のエントリーシートや面接に関する相談が集中する時期も静岡キャンパスに比べて2週間から1ヶ月程度早い。なお、2017年に比べて2018年は一般企業向けエントリーシートに関する相談が減少し、インターンシップに関する相談が増加したが、浜松キャンパスで一般企業を希望する学生は、夏季インターンシップなどに参加した企業を中心に応募企業を絞る傾向が見られ、また実質的な選考が6月以前にも行われる場合もあることから学生の応募件数自体も減少傾向にあると考えられる。

②伴走型個別支援での相談

浜松キャンパスでは2016年10月から2018年9月までの2年間で、100名以上の伴走型個別支援を行った。そのうち、軽微な相談に対応した者を除いた106名について、来訪のきっかけを初回来訪月別にまとめたものが表8である。宇賀田・栗田（2018）での静岡キャンパスと比べると「就職支援係を訪ねた際に知った」「学部教職員からの勧め」が比較的多く、「友人や先輩からの勧め」が少ない。工学系学生の就職に関する閉じられた情報収集ルートや指導教員などとの結びつきが強いことが推察される。

表8 伴走型個別支援 個別相談来訪のきっかけと初回来訪月(人数)

	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
学内アウトリーチ企画への参加	6	0	0	0	0	0	1	0	1	1	2	1
就職支援係を訪ねた際に知った	59	2	2	5	5	6	21	11	3	0	1	2
就職相談からの引き継ぎ	4	0	1	0	0	0	0	0	1	1	1	0
学部教職員からの勧め	12	0	1	1	0	1	0	2	1	4	1	0
学内掲示板を見て	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
友人や先輩からの勧め	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
学外アウトリーチ企画への参加	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
学生相談室等からの引き継ぎ	10	1	0	0	0	0	2	1	2	1	1	2
学外機関からの勧め	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
集中就職相談(HP予約)から	7	1	0	0	0	0	0	0	0	3	1	2
保護者からの相談	3	1	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0
大学HP(就職支援専用サイト)を見て	4	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	2
合計	106	5	4	6	5	8	21	16	4	8	12	7

来訪月は、3月と4月（採用広報解禁時期後）に多く、「就職支援係を訪ねた際に知った」のほか、「学部教職員からの勧め」「学生相談室等からの引き継ぎ」が見られるが、最終学年となった4月以降、卒業（修了）を意識し始めるなか、修学上の困難性や研究室活動との両立などの相談がきっかけとなるケースが少なくない。初回の主訴について、宇賀田・栗田（2018）は個別相談への行動を起こした背景を次の8つに分類した。

- ①一般企業からの不合格が続いている ②周りの友人の進路が決まり始めた（と感じるようになった）
 ③公務員等採用試験への不安を持っている（高まった） ④公務員・教員採用試験・院試（大学院入試）の不合格 ⑤卒業を意識し始めた ⑥（志向や環境の変化により）勤務地や職種の変更が生じた ⑦内定先に対する不信感を持っている ⑧納得のいく就職先を決めたい（という思いが強い）

浜松キャンパスでは、これらに加え次の5つの背景が確認できた。

- ⑨インターンシップへ応募したいが1人で準備が進まない
 ⑩当初考えていた進路を変更したい（大学院への進学や断念 迷いも含め）
 ⑪大学を辞めたいと考えている（退学後の就職が不安）
 ⑫将来への不安が募ってきた（希望が持てない、自分に自信が持てない）
 ⑬学校推薦等で応募した企業が不採用になった

特に⑩と⑪は、学生がそれまでに考えていた唯一の選択肢を失うような不安につながっている。また、初回相談時の「心の状態」について宇賀田・栗田（2018）は相談時の学生の言葉から、(i) 焦り (ii)

行き詰まり (iii) 意欲低下 (iv) 迷い (v) 無気力 (vi) 自信喪失 (vii) 劣等感の7つに分類したが、浜松キャンパスでは、これらに含まれない(viii)期待と不安 (ix) 緊張があった。「期待と不安」とは、「焦り」や「行き詰まり」などと異なり、「できるならやってみよう」というように相手や自身に対する期待を持ちながらもそこに踏み出すのに不安を持っている状態である。「迷い」とも異なり、どちらかといえど期待する選択肢に向けて後押しがほしいという印象もある。また「緊張」は表情が硬く、言葉が少ない、あるいは伝えたいことがうまく表現できない、先を見通し過ぎて自身に重責を感じる、プレッシャーをかけ苦しんでいる状態である。

さらに、「焦り」については、他者との比較から焦りを感じるだけでなく、自身の中で「就職活動をうまく進めることかできるか」「内定を得られるか」という思いが強い状態もあった。加えて「行き詰まり」については、就職活動で期待する結果が出ないだけでなく、学業や研究室活動などに対して自身が期待する（または想像する）見通しがどうしてもできず、打開策を見つけようと思いを巡らせている状態もあった。

以上のことを踏まえ、「相談への行動を起こした背景」と初回相談時の「心の状態」をクロス集計したものが表9である。これによれば、相談への行動を起こした背景として「納得のいく就職先を決めたい」が最も多く、表8でも採用広報解禁後の初回来訪人数が多いことから、就職活動、特に企業の選考が本格化したことが背景となっていることが推察される。また、これら学生について「焦り」が多く見られることから、「希望する職種・業界先で進路を決められるか」「早期に就職活動を終わらせ、研究室での取り組みに集中したい」というような心の動きも推察できる。

平均面談回数は、宇賀田・栗田（2018）では「劣等感」が最も多かったが、浜松キャンパスでも比較的多い。しかし、静岡キャンパスではそれほど多くなかった「意欲低下」や浜松キャンパスに見られた「緊張」は平均面談回数が多く、キャンパスでの違いがあった。

表9 伴走型個別支援 相談への行動を起こした背景と初回相談時の心の状態(人数)

		焦り	迷い	行き詰まり	自信喪失	無気力	意欲低下	劣等感	期待と不安	緊張
公務員・教員採用試験・院試の不合格	9	4	1	3	0	0	1	0	0	0
卒業を意識し始めた	12	3	0	2	1	3	0	2	1	0
一般企業からの不合格が続いている	9	0	1	7	1	0	0	0	0	0
公務員等採用試験への不安を持っている	3	0	0	0	0	0	0	0	1	2
周りの友人の進路が決まり始めた	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
内定先に対する不信感を持っている	2	0	1	0	0	1	0	0	0	0
勤務地や職種の変更が生じた	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
納得のいく就職先を決めたい	53	13	3	1	1	1	0	1	31	2
インターンシップへの応募	2	1	0	0	0	0	0	0	1	0
進路変更・迷い	7	1	2	2	0	0	2	0	0	0
大学を辞めたい	5	1	0	1	0	1	2	0	0	0
将来への不安を持っている・希望が持てない	2	0	1	0	0	0	0	0	1	0
推薦応募での不採用	2	0	0	1	0	0	0	0	0	1
合計(人)	106	23	9	17	3	6	5	3	35	5
平均面談回数(回)	3.43	2.83	1.67	6.29	5.67	3.17	7.80	7.67	1.14	7.80

さらに初回相談時の心の状態と表出傾向をクロス集計したものが表10である。「表出傾向」については、宇賀田・栗田（2018）が「自己流・こだわりの強さ」「依存・自主性欠如」「不安定な体調」「対人コミュニケーション力の問題」「家族関係での問題」の5点を挙げたが、浜松キャンパスではこれらに含まれない「修学問題」「研究（室）問題」があった。専門科目での学びや知識・技能が技術者としての就職に結びつきやすいことが背景となっていると考えられ、就職と学業、就職と研究は一体化している工学系学生の特徴と言えるだろう。なお、静岡キャンパスで多く見られた「依存・自主性欠如」は該当がな

かった。これも工学系学生の特徴とも考えられるが、支援者と学生との関係などからの影響も考えられる。

表10 伴走型個別支援 初回相談時の心の状態と表出傾向(人数)

		自己流・こだわりの強さ	依存・自主性欠如	不安定な体調	対人コミュニケーションカの問題	家族関係での問題	問題なし	修学問題	研究(室)問題
焦り	23	2	0	2	1	0	18	0	0
迷い	9	1	0	1	1	0	5	1	0
行き詰まり	17	2	0	1	3	1	7	0	3
自信喪失	3	1	0	1	0	0	1	0	0
無気力	6	3	0	0	1	1	0	1	0
意欲低下	5	2	0	1	1	0	0	1	0
劣等感	3	1	0	1	1	0	0	0	0
期待と不安	35	1	0	1	0	0	33	0	0
緊張	5	1	0	2	0	0	2	0	0
合計(人)	106	14	0	10	8	2	66	3	3
平均面談回数(回)	3.43	7.00	0	4.40	6.50	5.00	2.00	3.33	6.00

③工学系学生の具体的な支援ケース

これまで就職相談や伴走型個別支援のデータにおける静岡キャンパスとの違いに注目して工学系学生の就職不安に関する特徴を検証してきたが、具体的なケースからもアプローチしてみたい。なお、表記は支援者のメモをもとに一部変えた。

【ケース事例1】面接回数：全30回 心の状態：行き詰まり 表出傾向：自己流・こだわりの強さ

a. ケース概要：後学期が始まり、保護者より大学での就職支援について問い合わせがあり、後日、保護者が来訪。その当日、本人も相談に来訪。10月より就職支援を開始した。採用広報解禁の3月から4月は、エントリーシートなどの書類が期日までに書けず、1社も応募に至らず、そのまま時間が過ぎてしまった。完璧な書類を作成したい気持ちが強い。修士1年前期修了後、学生コンテストや資格試験などの行事が重なったことと、研究がうまくいかなかったこともあり、研究室からも遠ざかり行かなくなった。研究開発職を希望。本人の納得がいく就職先が得られるよう就職支援を行った。

b. 学生情報：工学専攻 修士2年生 男子

大学受験で目指した学部を断念し、工学部へ進学。方向転換するも共通点を見出し、入学してよかったと思っている。希望する業界・職種：なし/研究開発・設計・生産技術・品質管理

c. 初回相談時の主訴：就職活動らしいことはしてこなかった。会社説明会には行ったが書類が書けず応募まで至らなかった。書類作成が一番不安で、応募先を見つけることよりもまず書類を書き上げたい。その上で応募していきたい。

d. 来訪の経緯：保護者から就職支援について電話で問い合わせ。本人に行かせますと予約日時を決めるが、当日本人は現れず、代わりに保護者が来訪する。その後予約時間より遅れて本人が来訪。

e. 支援経過：2017年10月～2018年2月（全30回）

#1～8（2017.10～11月）

これまでの就職活動の状況を整理、信頼関係の構築に努めた。しかし、自己開示にはなかなか至らず、本人が一番不安に思っているという書類作成支援を開始し、本人の了承を得て週2回のペースとした。家での作成も促すが全く書いてくることができず、就職相談の中でひとつずつ内容を確認し進めていった。同時に求人情報の確認を勧めるが、書類が出来上がらなければ気になる求人があったとしても応募しないとの発言もあり、本人の意欲を損なわないことを心掛け書類作成支援を行った。

#9～13 (2017. 11 月)

これまで家での作業を促していたにもかかわらず全く書いてくることができなかったが、研究に関し、まとめるテーマを決定したことがきっかけで、自発的に研究を振り返り、A4版3枚にまとめてきた。そこで、研究室から遠ざかったしまった詳細を少しずつ話し始めた。また、指導教員からの連絡もあり再開する予定となった。指導教員からも就職についてのアドバイスを受け、教員との交流の再開が精神的に大きかった様子。研究室での活動再開を称賛するが本人は素直に受け止めていない。しかし、スローペースながらも前進していることは実感できている様子で、家で少しずつ作成してこられるようになってきた。引き続き、本人の意欲を損なわないことを心掛け、書類作成支援を行った。

#14～21 (2017. 12 月)

大学指定履歴書の清書、書類が完成。応募先を検討し志望動機作成を残している。希望する職種、応募先の検討を始めた。条件の優先順位の明確化、学科求人も積極的に確認。応募先の検討支援を行った。学科就職担当教員からの紹介で、指導教員も含め、企業側と急遽面談し会社見学となった企業あり。その他、本人が希望する企業へのエントリーも開始。志望動機作成支援を行った。志望動機作成が思うように進まず、本人の意欲低下が感じられ、気持ちの傾聴。「現実逃避、逃げたい」との発言あり。その後も逃げたいが、見捨てられたらどうしようと思ったと相談に来た。弱音が吐ける場所として、本人との信頼関係構築にあらためて努めた。本人が行動に移すことを待ちながら、気持ちの傾聴に努めた。

#22～30 (2018. 1～2 月)

本人の自己効力感が上がらない中でも、応募行動は始め、指導教員から勧められた企業への応募を検討。書類作成と今後に備え、面接練習を行った。面接練習の中で、「顔を上げる」「声は大きく」「思い切って言う」を約束事とした。うまく言えないと自信が持てず不安が大きくなるため、これだけはしてみようと本人の了承を得た。自己肯定感も低下し否定が多い中、指導教員からの紹介で面接、企業見学に行った企業から最終面接の連絡あり。約束事を忘れず、体調を整え面接に行くよう励ました。

最終面談の結果、内定となり今後の予定を確認。本人が不安なく就職に備えられるよう支援を行った。

f. 考察：研究室からも遠ざかり就職活動もできていなかったが、相談に来ることで少しずつきっかけが生じ、行動も起こせるようになり、内定につながったと考えられる。指導教員、および学科就職担当教員の協力も大きい。工学系では、研究がうまくいかなかったことをきっかけに研究室活動から遠ざかっていく学生の存在は考えられるが、指導教員からの働きかけは学生にとって心強い。

今回のケースでは、就職支援の開始時期は早いとは言えないが、本人の不安を軽減する支援を心掛けたこと、周囲の協力も得られたことで、本人が行動しようとする気持ちの変化が内定につながったと考えられる。

【ケース事例2】 面接回数：16回（継続中） 心の状態：行き詰まり 表出傾向：研究（室）問題

a. ケース概要：採用広報解禁になり企業説明会には行ったが、どこの企業にも興味が持てないでいた。研究室には就活で休む連絡をするが、実際には活動しなくなり、研究室にも行きづらくなってしまった。その後、指導教員からの連絡で保護者にも研究室に行っていないことが知られてしまい、このままではいけないこともわかっている。大学院を修了することを優先したいが、保護者に心配をかけたくなく自立

したいと思っている。研究室へ戻ることを優先としながら、今後の方向性が明確になるよう就職支援を行った。

b. 学生情報：工学専攻 修士2年生 男子

化学／科学、材料に興味関心があり当該学科を選択。選んだ研究室はイメージと違ったが興味をもって研究できている。希望する業界・職種：なし／研究開発・設計・生産技術・品質管理

c. 初回相談時の主訴：就活を言い訳に研究室から遠のいてしまったが就活も進んでいない。働くことのイメージも曖昧で、どうしたらいいかわからない。研究室へ行きづらくなってしまい、指導教員にも連絡できていないが大学院は修了したい。今後どうしたらよいか。

d. 来訪の経緯：保護者から就職支援について電話で問い合わせ。一緒に大学まで来るが相談は本人のみ。

e. 支援経過：2018年5月～2018年10月（16回）継続中

#1（2018.5月）

これまでの学生生活、および研究室と就職活動の状況を整理、信頼関係の構築に努めた。何が気になっているのかを明確にし、優先順位を考える支援を行った。また、就職活動の情報提供も行った。

#2～3（2018.6月）

前回の面談後、一番気になっていた指導教員へ連絡。返事もあり、自身の状況や気持ちは伝えられたと思うが、まだ踏ん切りがつかず研究室には戻っていない。研究室での活動も溜まっており、就活もしなければいけない。大学指定の履歴書も作成しようとしたが、何を書けばいいか悩みまだ書けていない。研究室での活動再開や就職活動で今できることを明確にする支援を行い、書類作成支援も行った。

#4～7（2018.7月）

相談予約をするが、来ない日もあり。後日連絡があり、途中まで来たが行く気になれずとのことだった。以前はもっとがんばれたが最近できない。本人の気持ちの傾聴をした。また、研究室に戻ったことを想定し、日常生活の見直しをする支援を行った。就職相談に大学に週1回来ることを約束としてもらい、来た時に大学生生活の振り返りを行い書類作成につなげる支援を行った。

#8～11（2018.8月）

気持ちの踏ん切りがつかず研究室へは戻っていない。まず指導教員へ再度連絡することを勧めるが躊躇している。大学生生活を振り返りながら強みを整理し、書類作成を進めていく支援を行った。これまでを振り返ることで、自身のできたことも明確になり言葉も増えた。誰かに頼ることはしたくないと思っていたが、保護者が指導教員に連絡を取り、3人で面談した結果、9月から研究室へ復帰することとなった。本人の安心した様子も伺える。9月にある学内個別企業説明会の情報提供を行い、参加も促した。

#12～15（2018.9月）

研究室への復帰に緊張していたが、同級生や後輩とも以前と変わらず会うことができ、今は気負うこともないとのことで表情も明るい。研究室に戻れたことで、気持ちの上での不安は軽減したが、反対に就職活動への焦りや応募先の迷いが増した。学内個別企業説明会には参加。行動し始めたことを称賛。企業情報提供と応募書類作成支援を行った。本人も応募先を選択し応募となった。

#16～（2018.10月～現在継続中）

応募先も書類選考が通過し面接となった。面接のポイントを確認し、面接練習を行った。指導教員にも就職活動状況を報告している。大学院修了に向け研究時間が足りないため、研究を優先して就職活動を進めていく。

f. **考察**：就職活動を始めたものの研究室へも行きづらくなっていたが、相談で自身の気持ちや学生生活を振り返り言葉にしていくことで気持ちの変化もあり、行動に移せるようになっていったと考えられる。本人はひとりで解決しようとしていたが、家族をはじめ、周囲の協力を受け入れたことが大きい。本人も自身に重責をかけていたが、それらが軽減し前向きになったことで表情も明るい。現時点では、就職活動継続中で内定には至っていないが、行動が必ず結果に結びつくと考えられる。

おわりに

7割以上が技術者となり、他学部系統よりも就職状況の良い工学系学生の就職不安の特徴について考察した。静岡キャンパスとの違いにより、就職と学業、あるいは就職と研究室活動との結びつきが強いことが学生の不安につながっていると推察できたが、論証を積み重ねるにはまだ十分でない。今後の相談データや支援者としての経験を重ねていきたい。

現状では、工学系学生への支援者として求められる姿勢として「弱音を吐ける場所となる」ことが仮定できる。工学系学生は、修学や研究での不安や問題が就職活動への支障となることがある。「学業についていけない」「研究の行き詰まり」「教員・同級生・後輩との関係性」など学生の状況や立場は想像以上に複雑な場合も多い。また、「就職率が良い」「高校生までは理系科目の成績がよかった」「学部を選ぶのに消去法で工学部が残った」などから、工学系学部へ進学をしたが、学生生活を送るうちに、自分には合わないと感じた、あるいはそれほど興味を持てなくなったというきっかけから、将来への不安が生じ、業界や職種などの進路の変更を考える学生もいる。

目指していた方向性を見失うことで、「行き詰まり」「無気力」「自信喪失」「意欲低下」を感じ、「誰にも言えない」「言い辛い」「プライドが邪魔している」など心の奥底にある本音を吐き出せる場所を見つけることができなくなる学生も多い。支援者には学生の状況に対して評価せず、理解を示し、味方である姿勢が何よりも求められる。就職相談や支援を通して、学生自身がここでは、「弱音を吐いてもいい」「人を頼ってもいい」と思えることができれば必要な支援を進めることができる。支援者にはそのきっかけをつくる役割があるのだろう。

引用文献

- 伊藤彰浩 2013「高度成長期と技術者養成教育—高等教育機関をめぐって」『日本労働研究雑誌』634, 40-51.
- 宇賀田栄次・栗田智子 2018「就職不安を抱える大学生に対する個別相談と支援の在り方—未内定学生への『伴走型個別支援』の取組から—」『静岡大学教育研究』14, 1-18.
- 内田千代子 2011「大学における休・退学、留年学生に関する調査 第31報」『平成22年度学生の心の悩みに関する教職員研修会第32回全国大学メンタルヘルス研究会 報告書』80-94.
- 厚生労働省・文部科学省 2018「大学等卒業予定者の就職内定状況調査（大学・短期大学・高等専門学校及び専修学校卒業予定者の就職内定状況等調査）：結果の概要」（<https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/131-1b.html>, 2018年11月18日）.
- 国立大学法人静岡大学 2009「第1回学生生活実態調査報告書」（https://www.shizuoka.ac.jp/campuslife/pdf/survey/20100419_02.pdf, 2018年11月29日）.
- 独立行政法人労働政策研究・研修機構 2015「大学等中退者の就労と意識に関する研究」（<https://www.>

jil.go.jp/institute/research/2015/138.html, 2018年11月29日).

丸山文裕 1984「大学退学に対する大学環境要因の影響力の分析」『教育社会学研究』第39集, 140-153.

文部科学省 2014「学生の中途退学や休学等の状況について」(http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/10/__icsFiles/afieldfile/2014/10/08/1352425_01.pdf, 2018年11月29日).

参考資料

国立大学法人静岡大学情報学部ホームページ (<http://www.inf.shizuoka.ac.jp/guide/history.html>, 2018年10月21日).

株式会社大学通信 大学探しナビホームページ (<https://www.univpress.co.jp/university/jitsushokuritsu/>, 2018年11月24日).

文部科学省 高等教育機関 学科系統分類表 (http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/__icsFiles/afieldfile/2018/08/02/1407357_4.pdf, 2018年10月21日).